（第3種郵便物認可）　2021年(令和3年)7月24日（土曜日）

土偶、モチーフは植物

竹倉史人さん新解釈

女性像通説に疑問

土偶は縄文人が食べていた植物をかたどったフィギュア――。縄文時代の土偶を巡る斬新な説を紹介した『土偶を読む』（晶文社）が話題だ。4月の刊行以降、すでに4刷。妊娠女性説や地母神説といった、従来の解釈と全く異なる「土偶論」が注目を集めている。

著者で人類学者の竹倉史人さん(45)＝写真＝は神話研究の一環で、「縄文時代の精神世界を反映した」土偶に興味を持った。考古学は門外漢だったが、人間の姿として不自然な土偶を「女性像」などとしてきた通説に疑問を感じた。

その上で、縄文時代にはクリやトチなど豊かな植物資源がありながら、「植物霊」の祭祀（さいし）の痕跡がほとんどない点を指摘。土偶と植物の関連性を追究し、＜縄文遺跡からはすでに大量の植物霊祭祀の痕跡が発見されており、それは土偶に他ならない＞としている。

例えば、表紙にもある中空土偶の顔はクリをかたどったものだという。言われてみると、中空土偶の顔の丸い形や、下部に見える曲線がクリに似ている。ハート形土偶とオニグルミ、「縄文のビーナス」の愛称で知られる土偶とトチノミという、意外な組み合わせも読み解いている。

中には貝をかたどったとする土偶もあるが、＜縄文人は貝類と堅果類を近似したカテゴリーとして認知していた＞と驚くべき発想の転換を披露する。

「見た目の類似」を重視する「図像解釈学」は美大で学んだ竹倉さんの得意分野。それに考古学的なデータを合わせ、土偶とモチーフの植物の分布に矛盾がない点を論証。多様な学問の方法論を駆使した「リベラルアーツ」の研究書と自負する。

縄文研究の黎明（れいめい）期である明治時代には、著名な人類学者がゴーグル状の目をした土偶を「遮光器土偶」と名付けた。「当時の研究には伸びやかな想像力があった。今は学問が細分化され過ぎ、自由な発想が難しくなっている」と話す。自身は大学に属さない「独立研究者」を掲げる。「縄文遺跡が世界遺産になり、土偶も世界的に注目される。日本が誇る文化財の土偶には一般の人も含め、様々な解釈があっていい」。今後は世界にも視野を広げ、自説の核となる先史時代フィギュアと植物霊祭祀の関連性を探究する。（多可政史）